

朧月夜論

大井田 晴彦

はじめに

鎌倉時代の物語評論『無名草子』は、「いみじき女」として筆頭に朧月夜の名を挙げる。

いみじき女は朧月夜の尚侍。源氏流されたまふもこの人のゆゑと思へば、いみじきなり。「いかなる方に落つる涙にか」など帝の仰せられたるほどなども、いといみじ。

(新潮日本古典集成・二八頁)

「いみじ」とはたいそうな、立派な、くらしいの意になるうが、肯定・否定の相半ばする評価と思われる。朧月夜という女君は、『源氏物語』の中でも際立った個性を示す人物である。彼女は、源氏の仇敵である右大臣家に生まれながらも、源氏と出逢い、危険な情事に耽溺してゆく。この恋愛事件により、春宮(朱雀)への入内は中止され、榮譽ある后妃への途も閉ざされた。源氏との出逢いが、彼女の人生を激変させたのである。源氏にとっても、政界追放、須磨流離の直接的な契機となった女君である。また朱雀の寵愛を受けながらも源氏へと強く心惹かれてゆく、理と情の

葛藤に苦しむ女君ともいえよう。波乱に満ちた彼女の生は、その性格、人柄とも関わりところが大きい。軽佻浮薄、官能的なものに人一倍敏感で、惑溺しがちな意志の弱さは、しばしば語り手や、当の光源氏からも指弾されるところであった。その欠点が、魅力ともなつて源氏を籠絡してもいる。源氏の若き日から晩年まで、長い歳月にわたつて関わりをもち続ける、この朧月夜という女君について考察したい。

一

源氏と朧月夜の出逢いは、「花宴」巻、源氏二十歳の春の夜のことであった。二月二十日過ぎの南殿の桜の宴が果てた夜、酔い心地の源氏は、藤壺のあたりを徘徊し、様子をうかがう。しかし藤壺も警戒しているのだろう、王命婦の局の戸口は堅く閉ざされている。落胆する源氏が弘徽殿の細殿に立ち寄ると、三の口が開いたままである。藤壺とは対照的な、開放的な無防備さに源氏は「かやうにて、世の中のあやまちはするぞかし」と、非難しつつ

も、新たなロマンスへの期待を抱くのだった。

夜いたう更けてなむこと果てける。上達部おのおのあかれ、
 后、春宮帰らせたまひぬれば、のどやかにぬるに、月いと
 明うさし出でてをかしきを、源氏の君、酔ひ心地に、見過ぐし
 がたのおぼえたまひければ、上の人々もうち休みて、かやうに
 思ひかけぬほどに、もしさりぬべき隙もやあると、藤壺わたり
 を、わりなう忍びてうかがひありけど、語らふべき戸口も鎖し
 てければ、うち嘆きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち参
 りたまへれば、三の口開きたり。女御は、上の御局にやがて参
 う上りたまひにければ、人少ななるけはひなり。奥の柩戸も開
 きて、人音もせず。かやうにて、世の中のあやまちはするぞか
 しと思ひて、やをら上りてのぞきたまふ。人は皆寝たるべし。
 いと若うをかしげなる声の、なべての人とは聞こえぬ、「朧月
 夜に似るものぞなき」とうち誦じて、こなたさまには来るもの
 か。いとうれしくて、ふと袖をとらへたまふ。女、恐ろしと思
 へるけしきにて、「あな、むくつけ。こは、誰そ」とのたまへ
 ど、「何か、うとましき」とて、

深き夜のあはれを知るも入る月のおぼろけならぬ契りと

ぞ思ふ

とて、やをら抱き下ろして、戸は押し立てつ。あさましきにあ
 きたるさま、いとなつかしうをかしげなり。わななくわなな
 く、「ここに、人」とのたまへど、「まろは、皆人に許されたれ

ば、召し寄せたりとも、なんでふことかあらむ。ただ、忍びて
 こそ」とのたまふ声に、この君なりけり、と聞き定めて、いさ
 さか慰めけり。わびしと思へるものから、情けなくこはごほし
 うは見えじ、と思へり。酔ひ心地や例ならざりけむ、許さむこ
 とは口惜しきに、女も若うたをやぎて、強き心も知らぬなるべ
 し、らうたしと見たまふに

〔花宴①三五五〜三五七頁 以下、引用は新編日本古典文学全
 集による〕

驚いたことに、若々しい女が「朧月夜に似るものぞなき」と口ず
 さみながら、こちらに近寄ってくるではないか。「こなたさまに
 は来るものか」の「ものか」には、やはり、非難と驚き、嬉しさ
 の入り交じった感動が込められている。これほど登場の仕方が
 鮮烈な女君は、他に若紫を数えるのみではないか。袖を捕らえら
 れて女は恐怖と驚きを感じるけれども、すぐに源氏に靡き果てて
 しまう。「強き心も知らぬなるべし」と評される彼女は、まさに
 このハムレットの「弱き者よ、汝の名は女」といった感がある。

このように、朧月夜との出逢いは、源氏の藤壺思慕に端を発し
 た、行きずりのものであった。源氏にとつて、朧月夜という女君
 は、藤壺への満たされぬ想いの代償でしかない、と言うのは酷だ
 ろうか。自分を厳しく遠ざける藤壺を、源氏は恨めしく思う反
 面、その重々しさ、慎み深さに執着を深めていく。一方、容易に
 靡く朧月夜には興味をそそられるものの、その軽々しさには不満

もおぼえる。「かのわたり（藤壺）のありさまの、こよなう奥ま
りたるはやと、ありがたう思ひくらべられ」（三五九頁）と、二
人が比較され、藤壺の完全さが賛美されるゆえんである。後にも
「袖口など、踏歌の折おぼえて、ことさらめきもて出でたるを、
ふさわしからずと、まづ藤壺わたり思し出でらる」（花宴①三六
四〜三六五頁）、「かやうのことにつけても、もて離れつれなき人
の御心を、かつはめでたしと思ひきこえたまふものから、わが心
の引くかたにては、なほつらう心憂し、とおぼえたまふ折多か
り」（賢木②一〇六頁）と、藤壺と隴月夜および右大臣家の優劣
が、しばしば語られている。

藤壺と隴月夜の対関係は、『伊勢物語』に淵源が求められる。
后がねとして大切に傳かれていた権門の姫君と男の、政治の論理
に引き裂かれた恋、一連の二条后（藤原高子）関連章段が、隴月
夜の物語の骨格をなしていることは、既に多くの指摘がある¹。意
中の藤壺でなく隴月夜と懇意になるという展開は、四段の「本意
にはあらで、心ざし深かりける人」による。そして、『伊勢』の
もう一方のヒロイン、伊勢の斎宮が、藤壺の造型と物語に投影し
ているのも周知の通りである。これらの女君との交渉が、男主人
公を、東国や須磨へと流離させることになる。

藤壺と隴月夜の対関係が、空蝉と軒端萩のそれとして語り直さ
れている点にも注意しておきたい。²老受領の後妻という境遇を強
く意識する空蝉は、源氏に惹かれつつも拒み通そうとする。「言

ひ立つればわるきによれる容貌」（空蝉①二二頁）にもかかわ
らず、自らを厳しく処する空蝉の「心」の気高さに源氏は魅了さ
れる。紀伊守邸再訪の際、源氏は空蝉の寝所に忍び込むが、察知
した空蝉はその場を逃れ、継娘の軒端萩が取り残される。空蝉へ
の不満とぼつの悪さから、源氏は軒端萩と契りを結んでしまう。

「いと白うをかしげにつぶつぶと肥えてそぞろか」「頭つき額つき
ものあざやかに、まみ、口つきいと愛敬づき、はなやかなる容
貌」「髪はいとふさやか」「にぎははしう愛敬づきをかしげ」と、
多くの形容が費やされるように、若々しく快活で、豊満な印象を
与える美しい娘であった。父伊予介が大切に傳くのも当然といえ
よう。一方、二藍の小桂だつものないがしろに着なして、紅の
腰ひき結へる際まで胸あらはにばうぞくなるもてなし」「心とげ
に見えてきはぎはとさうどけば」「すこし品おくれたり」（空蝉①
一一〇〜一一二頁）と評されるように、たしなみを欠いて、やや
品が劣る面もあるのだという。やがて軒端萩は蔵人少将を婿に迎
えるが、時折は源氏との手紙のやりとりもあるという。源氏と朱
雀、隴月夜の関係にも似る。右大臣の姫君と受領層の娘では、身
分も境遇も大きく異なるが、隴月夜と軒端萩の物語は同じ構図を
描いている。魅了されても源氏を厳しく拒み通そうとする一群の
女君たちと、容易に靡いてしまう、もう一群の女君たちがいる。
いつまでも源氏が執着を続けるのは、もちろん前者の女君たちで
ある。

二

最初の逢瀬の場面を続けて見てゆきたい。

ほどなく明けゆけば、心あわたたし。女は、まして、さまざまに思ひ乱れたるけしきなり。「なほ、名のりしたまへ。いかでか、聞こゆべき。かうてやみなむとは、さりともしされじ」とのたまへば、

憂き身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと
や思ふ

と言ふさま、艶になまめきたり。「ことわりや。聞こえ違へたる文字かな」とて、

「いづれぞと露のやどりを分かむまに小笹が原に風もこそ吹け

わづらはしく思すことならずは、何かつつまむ。もし、すかいたまふか」とも言ひあへず、人々起き騒ぎ、上の御局に参りちがふ気色ども、しげくまよへば、いとわりなくて、扇ばかりをしるしに取り換へて、出でたまひぬ。

(花宴①三五五〜三五九頁)

甘美な逢瀬の夢は、夜明けとともに破られる。素性を明かさぬ女に、源氏は名を尋ねるが、女は和歌を詠んでほぐらかすばかりである。その態度は「艶になまめ」⁽¹⁾ いている。この「艶」とは、「花宴」の美意識を端的に示す語でもある。『六百番歌合』の俊成

四

の判詞も想起される。右の優艶な場面に、読者は既視感をおぼえるであろう。すなわち「夕顔」との類似である。夕顔と朧月夜の物語の多くの類似点を、吉野瑞恵氏は指摘している。⁽³⁾ すなわち(1) 扇によって男女が結びつく、(2) 女君の側からの贈歌、(3) 源氏による女君の居場所の探索、(4) この世のみならぬ契り、(5) 女君が月に喩えられる／その月影が消える、(6) 源氏が女君に名のりを求める、というふうに、両者の関係は実に深いものがある。「死と官能」という夕顔物語の主題⁽⁴⁾を、朧月夜物語もまた継承している。夕顔と異なり朧月夜は死にこそしないものの、源氏の流離、破滅へと向かってゆく、死と隣り合わせの危険な恋としてあるのである。

をかしかりつる人のさまかな、女御の御おとうとたちにこそはあらめ、まだ世に馴れぬは、五、六の君ならむかし、帥宮の北の方、頭中将のすさめぬ四の君などこそ、よしと聞きしか、なかなかそれならましかば、今少しをかしからまし、六は春宮にたてまつらむところざしたまへるを、いとほしうもあるべいかな。

(花宴①三五八〜三五九頁)

名告りせぬ情事の後、女の素性について源氏は想像をめぐらす。未婚の五、六の君のいづれかであろう。帥宮や頭中将の妻であったら、いっそう面白いことだろうに、と不倫の恋への憧れも抱いている。右大臣家に波風立ててやろうという対抗心、悪戯心もうかがえよう。春宮に入内予定の六君だったら気の毒なことをし

た、とは思うものの、源氏の女君への態度は、遊戯的、趣味的恋愛の域を出るものではない。それでいて破滅へと突き進むような、一途な情念に囚われてもいるところに、源氏の恋の不可思議なあやにくさがある。

源氏と朧月夜が、破滅へと突き進んでゆく、物語の展開を追ってゆこう。「花宴」での再度の逢瀬は、右大臣家の藤花宴においてであった。春宮の間近い即位を控え、右大臣家は隆盛を極めつつある。それを象徴して咲き誇る藤花の宴に、日頃は対立している源氏も招かれた。「我が宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし」（三六三頁）という歌はいかにも得意げである。多くの上達部、親王たちが招集され、畏まっている中、ようやく源氏は姿を見せた。「あざれたるおほきみ姿のなまめきたる」麗姿は、「花のにほひもけおされて、なかなかことざまし」（三六四頁）だったという。類まれな源氏の美貌が、権勢を拡充しつつある右大臣家に冷や水を浴びせたかたちである。この場面は、すでに指摘のあるように『伊勢物語』百一段の変奏である。兄行平邸の宴に遅参した主人公が「咲く花の下に隠るる人を多みありしにまさる花の蔭かも」と、藤氏に諂う人々を揶揄した。源氏は、これを踏まえ、業平を気取って「この御前にこそは、蔭にも隠れさせたまはめ」（三六五頁）と戯れたのである。業平にせよ源氏にせよ、和歌や美貌によって世俗の権勢に一矢を報い、挑発してゆく、王統ならではの「みやび」が遺憾なく發揮された場

朧月夜論（大井田）

面である。酔いに紛れて先夜の扇の主を源氏は探し出す。「月」を共通語句とする贈答により女君の素性が判明した。女君との再会の感動をもって優艶な「花宴」は閉じられるが、その後の二人の関係はどうなったのか。

今後は、御匣殿、なほこの大将にのみ心つけたまへるを、「げにはた、かくやむごとなかりつる方も失せたまひぬめるを、さてもあらむに、なか口惜しからむ」など、大臣のたまふに、いと憎しと、思ひきこえたまひて、宮仕へも、をさをさしくだにしなければ、なか悪しからむと、参らせたてまつらむことを思しはげむ。君も、おしなべてのさまにはおぼえざりしを、口惜しとは思せど、ただ今は異ざまに分くる御心もなく、何かは、かばかり短かめる世に、かくて思ひ定まりなむ、人の怨みも負ふまじかりけり、といとど危ふく思し懲りにたり。

（葵②七五〜七六頁）

「花宴」は、源氏二十歳の春の出来事が語られる。翌年は、空白の一年であり、桐壺帝讓位、朱雀帝即位、冷泉の立坊、源氏の大將昇進などの重要な出来事があった。「葵」は、さらにその翌年、源氏二十二歳の巻である。その間の源氏と朧月夜の関係は、詳しく語られないが、源氏との関係が周知の事実となり、「春宮には、四月ばかりと思し定めたれば」（花宴①三六二頁）という当初の計画が挫折し、彼女は御匣殿として出仕することになったことが知られる。葵上の死後、源氏の婚取りも考える右大臣と、

五

いっそう源氏への憎しみを募らせていく弘徽殿の態度の違いが際立っていている。ともあれ二人の情事が結果として、右大臣家の権勢拡充の芽を摘み取ったことになる。「なほこの大将にのみ心つけたまへる」朧月夜に対し、源氏は「君も、おしなべてのさまにはおぼえざりしを、口惜しとは思せど、ただ今は異さまに分くる御心もな」という思いである。新枕を交わし、紫上への源氏の愛情はさらに強まった。そのような源氏にとって、朧月夜は魅力的で棄てがたくはあるけれども、二の次の存在に過ぎないのであった。

次巻「賢木」では、朧月夜は尚侍に任ぜられる。「やむごとくなくもてなして、人柄もいとよくおはすれば、あまた参りたまふ中にもすぐれて時めき」、新帝の寵愛を独占する。彼女の住まう弘徽殿は、その人柄を反映してか「いまめかしうはなや」かになった。しかし、彼女の心は満たされず、源氏とのひそかな逢瀬を重ねてゆく。桐壺院が崩御し、源氏を取り巻く状況は厳しくなる一方であるが、そうした危険を意識すればするほど、朧月夜への「心ざし」はまさってゆく。その矛盾した性格が「例の御癖」である。

御心の中は、思ひのほかなりしことどもを、忘れがたく嘆きたまふ。いと忍びて通はしたまふことはなほ同じさまなるべし。ものの聞こえもあらばいかならむと思しながら、例の御癖なれば、今しも御心ざしまさるべかめり。(賢木②一〇一頁)

さらには五壇の御修法で帝が謹慎している隙をうかがって、密会

する。「そら恐ろしう」とあるように、ここでも多くの人目を意識しながら身の破滅を予感することで、いっそう恋の情念が激しく燃え上がるのである。

わづらはしきのみまされど、尚侍の君は、人知れぬ御心し通へば、わりなくてもおぼつかなくはあらず。五壇の御修法の初めに、慎しみおはします隙をうかがひて、例の夢のやうに聞こえたまふ。かの、昔おぼえたる細殿の局に、中納言の君紛らはして入れたてまつる。人目もしげきころなれば、常よりも端近なる、そら恐ろしうおぼゆ。朝夕に見たてまつる人だに飽かぬ御さまなれば、ましてめづらしきほどにのみある御対面の、いかでかはおろかならむ。女の御さまも、げにぞめでたき御盛りなる、重りかなる方はいかがあらむ、をかしうなまめき若びたる心地して、見まほしき御けはひなり。

ほどなく明け行くにや、とおぼゆるに、ただここにしも、「宿直奏さぶらふ」と声づくるなり。また、このわたりに隠るへたる近衛司ぞあるべき、腹ぎたなきかたへの教へおこするぞかしと、大将は聞きたまふ。をかしきものからわづらはし。こかしこ尋ね歩きて、「寅一つ」と申すなり。女君、

心からかたがた袖を濡らすかなあくど教ふる声につけても

とのたまふさま、はかなだちて、いとをかし。

嘆きつつわが世はかくて過ぐせとや胸のあくべき時ぞと

もなく

静心なくて、出でたまひぬ。夜深き暁月夜の、えもいはず霧りわたれるに、いといたうやつれて、振る舞ひなしたまへるしも、似るものなき御ありさまにて、承香殿の御兄の藤少将、藤壺より出でて、月の少し隈ある立部のもとに立てりけるを、知らで過ぎたまひけむこそいとほしけれ。もどき聞こゆるやうもありなむかし。

(賢木②一〇四〜一〇六頁)

ここには相思相愛の男女の姿が描かれている。「朝夕にくおろかならむ」は、源氏の美貌に対する朧月夜の感動を語り手が推測する叙述であり、「女のく御けはひなり」は、源氏の視線に沿って叙した朧月夜の美貌。語り手は「重りかなる方はいかがあらむ」と釘をさすのを忘れない。夜明けを告げる宿直奏の声に、二人は逢瀬の感動から現実に戻される。ここで朧月夜から「心からく」の歌を詠みかけ、源氏が「嘆きつつく」の歌をもつて応じているのに注意されよう。異例の女性からの贈歌であるが、自ら積極的に歌を詠みかけるあたり、いかにも朧月夜らしい。ちなみに朧月夜の詠歌は作中9首、すべてが源氏との贈答であり、うち3首が贈歌である(花宴1首、賢木2首)。須磨以前に贈歌が集中し、以後はすべて返歌となるのは興味深い。

このように逢瀬を重ねていては人目につかぬはずもない。右の藤少将のように、見咎める者も出て来た。ついに二人の密事は右大臣、弘徽殿の知るところとなり、絶体絶命の事態に追い詰めら

朧月夜論(大井田)

れる。

そのころ、尚侍の君まかでたまへり。瘡病に久しう悩まひて、まじなひなども心やすくせむとてなりけり。修法など始めて、おこたりたまひぬれば、誰も誰も、うれしう思すに、例の、めづらしき隙なるをと、聞こえ交はしたまひて、わりなきさまにて夜な夜な対面したまふ。いと盛りに、にぎははしきはひしたまへる人の、すこしうち悩みて、瘦せ瘦せになりたまへるほど、いとをかしげなり。後の宮も一所におはするころなれば、けはひいと恐ろしけれど、かかることしもまさる御癖なれば、いと忍びて、たび重なりゆけば、気色見る人々もあるべかめれど、わづらはしうて、宮にはさなむと啓せず。大臣、はた思ひかけたまはぬに、雨にはかにおどろおどろしう降りて、神いたう鳴りさわぐ暁に、殿の君達、宮司など立ちさわぎて、こなたかなたの人目しげく、女房どもも怖ぢまどひて、近う集ひ参るに、いとわりなく、出でたまはむ方なくて、明け果てぬ。御帳のめぐりにも、人々しげく並みるたれば、いと胸つぶらはしく思さる。心知りの人二人ばかり、心を惑はす。

神鳴りやみ、雨すこしをやみぬるほどに、大臣渡りたまひて、まづ、宮の御方におはしけるを、村雨のまぎれにてえ知りたまはぬに、軽らかにふとはひ入りたまひて、御簾引き上げたまふまに、「いかにぞ。いとうたてありつる夜のさまに、思ひやりきこえながら、参り来でなむ。中将、宮の亮など、さぶ

らひつや」など、のたまふけはひの、舌疾にあはつけきを、大將は、ものまぎれにも、左の大臣の御ありさま、ふと思しくらべられて、たとしへなうぞ、ほほ笑まれたまふ。げに、入り果ててものたまへかしな。

尚侍の君、いとわびしう思されて、やをらるざり出でたまふに、面のいたう赤みたるを、なほ悩ましう思さるるにやと見たまひて、「など、御気色の例ならぬ。もののけなどのむつかしきを、修法延べさすべかりけり」とのたまふに、薄二藍なる帯、御衣にまつはれて引き出でられたるを見つけたまひて、あやしと思すに、また、畳紙の手習ひなどしたる、御几帳のものと落ちたり。これはいかなる物どもぞと、御心おどろかれて、「かれは、誰れがぞ。けしき異なるものさまかな。たまへ。それ取りて誰がぞと見はべらむ」とのたまふにぞ、うち見返りて、我も見つけたまへる。紛らはすべきかたもなければ、いかかは答へきこえたまはむ。我にもあらでおはするを、子ながらも恥づかしと思すらむかしと、さばかりの人は、思し憚るべきぞかし。されど、いと急に、のどめたるところおはせぬ大臣の、思しもまはさずなりて、畳紙を取りたまふまに、几帳より見入れたまへるに、いといたうなよびて、つましからず添ひ臥したる男もあり。今ぞやをら顔ひき隠して、とかう紛らはず。あさましうめざましう心やましけれど、直面には、いかでかはあらはしたまはむ。目もくるる心地すれば、この畳紙を取

りて、寝殿に渡りたまひぬ。尚侍の君は、我がの心地して、死ぬべく思さる。大將殿も、いとほしう、つひに用なき振る舞ひのつもりて、人のもどきを負はむとすることと思せど、女君の心苦しき御気色をとかく慰めきこえたまふ。

(賢木②一四三〜一四六頁)

朧月夜が瘧病の治療で退出したのを好機とばかりに、二人は大膽にも右大臣邸で密会を重ねる。右の場面は、『伊勢物語』二条后章段の引用が著しい。里下がりの女のもとに男が通うという設定は六十五段に依る。また「後の宮も一所におはする」とは、高子が順子(四段)や明子(六・六十五段)のもとに身を寄せていたとあるのを彷彿させる。「たび重なりゆけば、気色見る人々もあるべかめれど」は、五段の「人しげくもあらねど、たび重なりければ」を念頭に置いていよう。源氏にとつて危険きわまりない状況だが、「かかることしもまさる御癖」ゆえ、いつそう恋の冒險に身を投じてゆくこととなる。折しも雷雨の後、見舞いに訪れた右大臣は源氏の姿を認め、動転して弘徽殿に報告する。源氏の大胆不敵な振る舞いは、彼らの怒りと憎しみを増長させた。いよいよ源氏の政界追放の企てが実行に移されるのである。やつとの思いで芥川のあたりまで連れ出した高子を、雷雨の夜に、蔵の鬼に食われてしまった、という六段にも対応する場面である。『伊勢』では続く七段から一連の東下り章段が語られる。右は須磨下向の直前に位置する場面であり、やはり呼応関係が顕著である。

三

多くの女君たちと別れを惜しみつつ、源氏は都を去った。この世で再び逢えるかどうかもわからない。須磨流離の原因が自分にあるだけに、朧月夜の心痛は一段と深いものがあつたはずである。出発前には人目を忍んで「わりなく」手紙を交わし（須磨②一七七〜一七八頁）、また須磨からは中納言の君の私信を装つて文通している（須磨②一八九、一九二頁）。そうした源氏への想いを胸にしつつ、朧月夜は尚侍として朱雀帝に近仕する。

尚侍の君は、人笑へにいみじう思しくづほるるを、大臣いとかなしうしたまふ君にて、切に宮にも内裏にも奏したまひければ、限りある女御、御息所にもおはせず、公さまの宮仕へと思し直り、また、かの憎かりしゆゑこそ、いかめしきことも出で来しか、許されたまひて、参りたまふべきにつけても、なほ心に染みにし方ぞ、あはれにおぼえたまひける。

七月になりて参りたまふ。いみじかりし御思ひの名残なれば、人のそしりも知らしめされず、例の、上につとさぶらはせたまひて、よろづに怨み、かつはあはれに契らせたまふ。御さま容貌もいとなまめかしうきよらなれど、思ひ出づることのみ多かる心のうちぞ、かたじけなき。御遊びのついでに、「その人のなきこそ、いとさうざうしけれ。いかにましてさ思ふ人からむ。何ごとも光なき心地するかな」とのたまはせて、「院

朧月夜論（大井田）

の思しのたまはせし御心を違へつるかな。罪得らむかし」と、涙ぐませたまふに、え念じたまはず。「世の中こそ、あるにつけてもあぢきなきものなりけれ、と思ひ知るままに、久しく世にあらむものとなむ、さらに思はぬ。さもなりなむに、いかか思さるべき。近きほどの別れに思ひ落とされむこそ、ねたけれ。生ける世にとは、げに、よからぬ人の言ひおきけむ」と、いとなつかしき御さまにて、ものをまことにあはれと思し入りてのたまはするにつけて、ほろほるとこぼれ出づれば、「さりや。いづれに落つるにか」とのたまはず。「今まで御子たちのなきこそ、さうざうしけれ。春宮を院のたまはせしさまに思へど、よからぬことども出で来れば、心苦しう」など、世を御心のほかにまつりごちなしたまふ人々のあるに、若き御心の、強きところなきほどにて、いとほしと思したることも多かり。

（須磨②一九六〜一九八頁）
源氏と艶聞のあつた朧月夜を許し、寵愛するとは破格の厚遇である。彼女自身、そのことを痛いほど承知している。しかし、想いは遠く須磨にいる源氏へと向かつている。理と情に引き裂かれ、情へと傾斜する彼女の心弱さが、ここにもうかがえる。このあたり、『伊勢』六十五段の次の叙述を想起させる。

この帝（清和）は、顔かたちよくおはしまして、仏の御名を、御心に入れて、御声はいと尊くて申したまふを聞きて、女はいたう泣きけり。「かかる君に仕うまつらで、宿世つたなく

かなしきこと。この男にほだされて」とてなむ、泣きける。

〔拙著『伊勢物語 現代語訳・索引付』一三四頁〕

帝自身、彼女の想いをよく知るだけに、その心中は複雑である。朧月夜の心を占有できず、右大臣らの傀儡にとどまり、不明にも源氏を追放させてしまった、自身を省みるに忸怩たるものがある。

やがて源氏は罪を許され、都に召還された。帝は讓位の準備を進めている。祖父大臣の死、また母後の病氣、そして何よりも自身の病悩が、退位を決断させたのである。帝の寵愛を独占したとはいえ、朧月夜は、不振のまま短命に終わった朱雀朝において妃にもなれず、皇子女を儲けることもなかった。人々の当初の期待に反した、映え映えしからぬ半生だったといえよう。それも源氏との出逢いゆえである。

おりみなむの御心づかひ近くなりぬるにも、尚侍、心細げに世を思ひ嘆きたまへる、いとあはれに思されけり。「大臣亡せたまひ、大宮も頼もしげなくのみ篤いたまへるに、我が世残り少なき心地するになむ、いといとほしう、名残なきさまにてとまりたまはむとすらむ。昔より人には思ひ落としたまへれど、みづからの心ざしのまたなきならひに、ただ御ことのみなむ、あはれにおぼえける。立ちまさる人、また御本意ありて見たまふとも、おろかならぬ心ざしはしも、なずらはざらむと思ふさへこそ、心苦しけれ」とて、うち泣きたまふ。女君、顔はいと

赤く匂ひて、こぼるばかりの御愛敬にて、涙もこぼれぬるを、よろづの罪忘れて、あはれにらうたしと御覽せらる。「なか、御子をだに持たまへるまじき。口惜しうもあるかな。契り深き人のためには、今見出でたまひてむと思ふも、口惜しや。限りあれば、ただ人にてぞ見たまはむかし」など、行く末のこゝとをさへのはたまはするに、いと恥づかしうも悲しうもおぼえたまふ。御容貌など、なまめかしうきよらにて、限りなき御心ざしの年月に添ふやうにもてなさせたまふに、めでたき人なれど、さしも思ひたまへらざりし気色心ばへなど、もの思ひ知られたまふままに、なとて、わが心の若くいほけなきにまかせて、さる騒ぎをさへ引き出でて、我が名をばさらにもいはず、人の御ためさへなど思し出づるに、いと憂き御身なり。

〔濹標②二八〇〜二八一頁〕

この、帝と朧月夜の対話の場面は、前掲の須磨巻のそれに酷似した、繰り返しとなっている。やはり帝と源氏の板挟みとなり、理と情とに引き裂かれ、後者へと傾斜する心弱さが語られる。帝は、源氏の卓抜を認めつつも、朧月夜への「心ざし」は勝っていると訴える。帝の真摯で誠実な愛情に対し、源氏の態度は「さしと思ひたまへらざりし気色心ばへ」に過ぎないことを朧月夜は承知している。しかし、むしろ心はその愛情薄い源氏に奪われてしまっている。ちなみに朧月夜は源氏との間に9組もの和歌を交わしているが、帝との贈答は語られない。和歌によって女性の魂を

揺き振り、掌握してゆく源氏の「いろごのみ」性が如実としていよう。⁵³源氏と帝と朧月夜、彼らの想いはいずれも一方通行であり、一組として正面から向き合うものはない。残酷なまでにあやにくで不毛な男女の構図が、ここにはある。この場面も、前掲『伊勢』六十五段を踏まえているが、さらに『うつほ物語』一蔵開⁵⁴上巻の次の場面との類似も見逃せない。

春宮、簾の内に立ちたまひて（仲忠ヲ）見たまひつつ、「いと景迹にもなりまさりにける人かな。いかにあらむとて、かくあるらむ。（中略）この人、昔の心思し出でたる時か、取りもあへず、ただむつかりにむつかりて憎みたまひてや。（仲忠ハ）かたち、するわざこそよなからめ、心ざしは並ぶ人あらじ、とぞ思ふや。かやうにてある人は、人一人につきてはあらざなれど、そこに人を並べては見せたてまつらじとこそ、今も行く先も思へ。参りたまひて後は、ことにさることもなし。

（室城秀之『うつほ物語全』五三〇頁）

多くの男性から求婚されながらも、ついにあて宮は春宮に入内、藤壺と呼ばれたのであった。男たちに冷淡なあて宮も、仲忠だけは慕わしく想い、秘かに心を寄せていた。結局二人は結ばれなかったが、入内後も親しい交流を続けている。帝は仲忠の卓抜を認めざるを得ないが、藤壺への「心ざし」は及ぶものがないと訴える。求婚譚において敗れたかに見えた仲忠は、藤壺の愛情を得ているという点で、実は真の恋の勝者なのだった。源氏・朧月

朧月夜論（大井田）

夜・朱雀帝の三者の物語は、『伊勢』および『うつほ』の延長線上にある。

四

源氏の帰京後、朱雀の退位後も朧月夜は物語に登場する。以前に比べると、その存在感は希薄になる。かつての右大臣家が衰退し、源氏との激しい争い、対立関係は解消した。そうした危機感や緊張感が失われると、朧月夜への情熱が冷めてくるのも当然であらう。とはいえ、思い出されたかのように要所要所で登場する。彼女の後半生を見てゆきたい。

尚侍の君、なほえ思ひ放ちきこえたまはず。こりずまに立ち返り、御心ばへもあれど、女は憂きにこりたまひて、昔のやうにもあひしらへきこえたまはず。なかなか、所狭う、さうざうしう世の中思さる。（濬標②二九九頁）

源氏は朧月夜を諦めがたく、「こりずま」に復縁を迫る。が、朧月夜は「憂きにこり」て、誘いには応じようとしらない。引用は省略するが、この前には、源氏の花散里訪問、また五節への忘れ難い想いが語られている。花散里との再会に多くの筆が割かれているのに対し、朧月夜への言及はそつけない。次第に花散里の重みが増していることが知られるであらう。また二条東院のごとき、多くの女君たちを集める施設の構想もうかがえる。もちろん朧月

夜がその一員となる可能性はないけれども。

尚侍の君も、のどやかに思し出づるに、あはれなること多かり。今もさるべきをり、風のつてにもほのめき聞こえたまふこと絶えざるべし。
(少女③七五頁)

右は、朱雀院御幸の一場面。退位した朱雀院の周辺は、在位時の活気はなく物寂しい。朧月夜は、姉弘徽殿とともに昔を偲びつつ静かに日々を過ごしている。時折は源氏との文通も続いているようである。絵合の晴儀は、派手好きで朱雀讓位後の無聊を託つ彼女にとって、華やかな昔に戻れる、またとない好機であった。ここでは姪の弘徽殿女御に加勢し、物語絵を熱心に収集するさまが語られる。「尚侍の君も、かやうの御好ましきは人にすぐれて、をかしきさまにとりなしつつ集めたまふ」(絵合②三八五頁)と、絵に関する趣味の良さが語られている。源氏や朱雀院が梅壺に荷担するのに対抗し、弘徽殿を支援する朧月夜には一種の爽快さがある。⁽⁷⁾源氏の「みやび」の好敵手という一面が認められるのである。何よりも朧月夜の優れた感性、才気を示すのが、「手」である。女君たちの筆跡について、紫上に源氏は次のように語っている。

「院の尚侍こそ、今の世の上手におはすれど、あまりそぼれて癖ぞ添ひためる。さはありとも、かの君と、前齋院と、ここにこそは、書きたまはめ」と、ゆるしきこえたまへば

(梅枝③四一六頁)

当代の名手として、朧月夜と朝顔、紫上が挙げられている。朧月夜の筆跡が全面的な称賛でなく「あまりそぼれて癖ぞ添ひ」とあるのは、その人柄を反映しているようで興味深い。いかにも人の目を惹きつけるような、才気ある洒落た書きぶりなのだろう。ここで注意したいのは、当人である紫上は措いて、朝顔が話題に上っていることである。はじめに取り上げた『無名草子』でも「いみじき女」として、朧月夜に続いて朝顔を挙げている。「朝顔の宮、さばかり心強き人なめり。世にさしも思ひとめられながら、心強くてやみたまへるほど、いみじくこそおぼゆれ」とある。さらに空蟬、宇治の大君、六条御息所の中将が「いみじき女」とされる。「心強く」源氏を拒み通した朝顔は、朧月夜とは全く対蹠的であるが、どちらも「いみじ」という性格では共通するのだろう。ともに古くからの馴染みであり、六条院の外にいなから、折を忘れぬ文通は続いている、という源氏との関係も似ている。この二人はやがて一対のものとして物語から退場するので、それは後述にゆだねよう。

五

女三宮の裳着を終え、朱雀院は出家した。院は迷妄の人である。しばしば宮への愛情を口にする院は「子を思ふ道は限りありけり。かく思ひしみたまへる別れのたへがたくもあるかな」(若

菜上④(四四頁)と朧月夜への未練執着を隠さない。翌年二月に「西山なる御寺」に移り、女御や更衣たちもそれぞれ里邸に退出した。朧月夜は「故後の宮のおはしましし二条宮」に移り住むこととなった(若菜上④七六頁)。出家を願うも院に諫止され、少しづつ仏事の準備を進めるのだった。これを好機と、源氏は朧月夜との復縁を願う。源氏が昔をいとおしみ、朧月夜との共感を求めているのは確かである。しかしこれが、紫上と女三宮との間に板挟みとなって息苦しきを感じる源氏の、現実からの逃避であることに注意しておきたい。

六条の大殿は、あはれに飽かずのみ思してやみにし御あたりなれば、年ごろも忘れがたく、いかならむ折に対面あらむ、今一たびあひ見て、その世のことも聞こえまほしくのみ思しわたるを、かたみに世の聞き耳も憚りたまふべき身のほどに、いとほしげなりし世の騒ぎなども思し出でらるれば、よろづにつつま過ぎしたまひけるを、かうのどやかになりたまひて、世の中を思ひしづまりたまふらむころほひの御ありさま、いよいよゆかしく心もとなければ、あるまじきこととは思しながら、おほかたの御とぶらひにことつけて、あはれなるさまに常に聞こえたまふ。若々しかるべき御あはひならねば、御返りも時々つけて聞こえ交はしたまふ。昔よりもこよなくうち具し、ととのひ果てにたる御けはひを見たまふにも、なほ忍びがたくて、昔の中納言の君のもとにも、心深きことどもを常にのたまふ。か

朧月夜論(大井田)

の人の兄なる和泉前守を召し寄せて、若々しくいにしへに返りて語らひたまふ。「人伝てならで、物越しに聞こえ知らすべきことなむある。さりぬべく聞こえなびかして、いみじく忍びて参らむ。今は、さやうの歩きも所狭き身のほどに、おぼろけならず忍ぶべきことなれば、そこにもまた人には漏らしたまはじと思ふに、かたみにうしろやすくなむ」とのたまふ。尚侍の君、いでや、世の中を思ひ知るにつけても、昔よりつらき御心を、こころ思ひつめつる年ごろの果てに、あはれに悲しき御ことをさし置きて、いかなる昔語りをか聞こえむ、げに、人は漏り聞かぬやうありとも、心の問はむこそいと恥づかしかるべけれ、とうち嘆きたまひつつ、なほ、さらにあるまじきよしをのみ聞こゆ。いにしへ、わりなかりし世にだに、心交はしたまはぬことにもあらざりしを、げに、背きたまひぬる御ためうしろめたきやうにはあれど、あらざりしことにもあらねば、今しもげざやかに清まはりて、立ちにし我が名、今さらに取り返したまふべきにや、と思し起こして、この信太の森を道のしるべにて参うでたまふ。

女君には、「東の院にものする常陸の君の、日ごろわづらひて久しくなりにけるを、もの騒がしき紛れにとぶらはねば、いとほしくてなむ。昼など、げざやかに渡らむも便なきを、夜の間に忍びてとなむ思ひはべる。人にもかくとも知らせじ」と聞こえたまひて、いといたく心懸想したまふを、例はさしも見え

たまはぬあたりを、あやし、と見たまひて、思ひ合はせたまふこともあれど、姫宮の御事の後は、何事も、いと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにておはす。
 (若菜上④七七〜八〇頁)

朧月夜を忘れ難く思う源氏は、「あるまじきこと」と躊躇うものの、いっそう成熟し魅力を増した彼女の様子を想像すると逢わずにはいられない。和泉守に手引きを命ずるのだった。一方、朧月夜は、対面を拒絶しようとする。源氏の「昔よりつらき御心」に何度となく悩まされてきたのに、「あはれに悲しき御こと(朱雀院の出家)」をさしおいて今さら対面など出来ようか、と思うのである。「無き名ぞと人には言ひてありぬべし心の問はばいかか答へむ」(後撰集・恋三・詠み人知らず)によりながら、自身の良心に従おうとする。源氏は院を裏切ることを「うしろめた」く思うものの、やはり「群鳥の立ちにし我が名いまさらに事無しぶともしるしあらめや」(古今集・恋三・詠み人知らず)によりつつ、開き直って二条邸へと向かう。このあたり、他にも「和泉なる信田の森の葛の葉の千重に別れて物をこそ思へ」(古今六帖・第二)など引歌による修辭が目立ち、恋の場面を導いてゆく。源氏は二条東院の末摘花の見舞いと偽って、出掛けてゆく。源氏は朱雀院だけでなく紫上をも裏切ったことになる。もちろん、紫上はその嘘を見抜いているが、もはや心を閉ざした彼女は、無関心な態度を装うばかりである。

その日は、寝殿へも渡りたまはで、御文書き交はしたまふ。薫物などに心を入れて暮らしたまふ。宵過ぐして、むつまじき人の限り、四五人ばかり、網代車の昔おぼえてやつれたるにて出でたまふ。和泉守して、御消息聞こえたまふ。かく渡りおはしましたるよし、ささめき聞こゆれば、驚きたまひて、「あやしく。いかやうに聞こえたるにか」とむつかりたまへど、「をかしやかに帰したてまつらむに、いと便なうはべらむ」とて、あながちに思ひめぐらして、入れたてまつる。御とぶらひなど聞こえたまひて、「ただこもとに、物越しにても。さらに昔のあるまじき心などは、残らずなりにけるを」と、わりなく聞こえたまへば、いたく嘆く嘆くみざり出でたまへり。さればよ、なほ氣近きは、とかつ思さる。かたみに、おぼろけならぬ御みじろきなれば、あはれも少なからず。東の対なりけり。辰巳の方の廂に据ゑたてまつりて、御障子のしりばかりは固めたれば、「いと若やかなる心地もするかな。年月の積もりをも、紛れなく数へらるる心ならひに、かくおぼめかしきは、いみじうつらくこそ」と恨みきこえたまふ。(若菜上④八〇〜八一頁)

源氏は訪問の準備に余念がない。四十賀を祝われたばかりの、准太上天皇とは思えない若々しさと軽々しきである。源氏の来訪に当惑し、不快感さえ示していた朧月夜だったが、次第に態度を軟化させてゆく。やはり昔と変わらぬ、靡きやすい女だ、と源氏は思う。旧知の仲であるだけに「あはれ」も深い。しかも「東の

対」とは、かつて藤花宴が行われた場所であり、二人の思いは過去へと向かう。さすがに「御障子のしりばかりは固め」てはいるものの、いつまで源氏の誘惑に抗い続けることができようか。

夜いたく更けゆく。玉藻に遊ぶ鴛鴦の声々など、あはれに聞こえて、しめじめと人目少なき宮の内のありさまも、さも移りゆく世かなと思し続けるに、平中がまねならねど、まことに涙もろになむ。昔に変はりて大人大人しくは聞こえたまふものから、これをかくてやと、引き動かしたまふ。

女、

涙のみせきとめがたき清水にてゆき逢ふ道ははやく絶え
にき

などかけ離れ聞こえたまへど、いにしへを思し出づるも、誰により多うはさるいみじきこともありし世の騒ぎぞは、と思ひ出でたまふに、げに、今一たびの対面はありもすべかりけり、と思し弱るも、もとよりづしやかなるところはおはせざりし人の、年ごろは、さまざまに世の中を思ひ知り、来し方を悔しく、公私のことにふれつつ、数もなく思し集めて、いといたく過ぐしたまひにたれど、昔おぼえたる御対面に、その世のことも遠からぬ心地して、え心強くももてなしたまはず。なほ、らうらうじく、若うなつかしくて、一方ならぬ世のつつましさをあはれをも、思ひ乱れて、嘆きがちにてものしたまふけしき

朧月夜論(大井田)

など、今始めたらむよりもめづらしくあはれにて、明けゆくもいと口惜しくて、出でたまはむ空もなし。(若菜上④八一〜八二頁)

「玉藻に遊ぶ鴛鴦の声」に源氏の恋心は掻き立てられる。これは「春の池の玉藻に遊ぶにほ鳥の足のいとなき恋もするかな」(後撰集・春中・宮道高風)を踏まえ、かつ「にほ鳥」を夫婦仲の良い「鴛鴦」に転じた表現であり、いかにも逢瀬の場面にふさわしい。かつては賑わいを誇っていた右大臣邸も、現在は人少なでもの寂しい。移り変わる世に源氏は感慨を深くするのだった。このあたり、「またの正月に、梅の花盛りに、去年を恋ひていきて、立ちて見、みて見れど、去年に似るべくもあらず」(伊勢物語・四段)によく似た雰囲気である。源氏の「年月をく」は、長い年月に隔てられてようやく逢うことができたのに、関に遮られる、堰き止められずに涙が落ちることです、の意。朧月夜の「涙のみく」は、涙だけは逢坂の関の清水のように堰き止めがたく流れますが、あなたとお逢いする道はすでに絶えております、の意。源氏を拒もうとするものの「かけ離れ聞こえたまへど」「過ぐしたまひにたれど」と逡巡を重ね、やはり強く退けることはできない。甘美な昔の記憶が、結局は源氏を迎え入れてしまう。ここにも彼女の心弱さがうかがえる。恋の雰囲気を湛えた場面であるが、「平中がまねならねど、まことに涙もろになむ」とやや水をさすような評言が見られるのも注意しておきたい。業平ならぬ

平中を引き合いに出す点に源氏への皮肉な眼差しも認められようが、やはり朧月夜に対する源氏の扱いの軽さ、不誠実さを物語っている。

朝ぼらけのただならぬ空に、百千鳥の声もいとうららかなり。花は皆散り過ぎて、名残かすめる梢の浅緑なる木立、昔、藤の宴したまひし、このころのことなりけりかしと思し出づる。年月の積もりにけるほど、その折のこと、かき続けあはれに思さる。中納言の君、見たてまつり送るとて、妻戸押し開けたるに、立ち返りたまひて、「この藤よ。いかに染めけむ色にか。なほ、えならぬ心添ふ匂ひにこそ。いかでか、この蔭をば立ち離るべき」と、わりなく出でがてに思しやすらひたり。山際よりさし出づる日のはなやかなるにさしあひ、目もかかやく心地する御さまの、こよなくねび加はりたまへる御けはひなどを、めづらしくほど経ても見たてまつるは、まして世の常ならずおぼゆれば、さる方にも、などか見たてまつり過ぐしたまはざらむ、御宮仕へにも限りありて、際ことに離れたまふこともなかりしを、故宮の、よろづに心を尽くしたまひ、よからぬ世の騒ぎに、軽々しき御名さへ響きてやみにしよ、など思ひ出でらる。名残多く残りぬらむ御物語のとぢめには、げに残りあらせまほしきわざなめるを、御身、心にえまかせたまふまじく、ここの人目もいと恐ろしくつつましかれば、やうやうさし上がり行くに、心あわたたしくて、廊の戸に御車さし寄せた

る人々も、忍びて声づくりきこゆ。人召して、かの咲きかかりたる花、一枝折らせたまへり。

沈みしも忘れぬものをこりずまに身も投げつべき宿のふぢ波

いといたく思しわづらひて、寄りゐたまへるを、心苦しう見たてまつる。女君も、今さらにいとつつましく、さまざまに思ひ乱れたまへるに、花の蔭は、なほなつかしくて、

身を投げむふちもまことのふちならでかけじやさらにこりずまの波

いと若やかなる御振る舞ひを、心ながらもゆるさぬことに思しながら、関守の固からぬたゆみにや、いとよく語らひおきて出でたまふ。そのかみも、人よりこよなく心とどめて思うたまへりし御心ざしながら、はつかにてやみにし御仲らひには、いかでかはあはれも少なからむ。
(若菜上④八二〜八五頁)

源氏の訪問は、晩春のことであった。おのずと記憶は二十年前の右大臣家の藤花宴へと遡る。源氏は「この藤よくこの蔭をば立ち離るべき」と藤に寄せて朧月夜への執心を訴える。藤には人と人をつなぐ呪力があるとされるが、源氏の来訪もその不可思議な靈力に導かれた面があるのではないか。源氏の詠歌「沈みしも」は、須磨の浦で沈淪していたことも忘れていないのに、性懲りも無く、宿の藤波の淵に身を投げてしまいうです、の意。朧月夜の返歌「身を投げむ」は、あなたが身を投げようとおつ

しやる淵も真の淵ではないのに、性懲りも無く偽りの淵の波に袖を濡らすことはいたしません、の意。源氏の愛情の薄さを詰る歌だが、贈歌に密着しているところに源氏への執着がうかがえもする。なお、ここで「百千鳥さへずる春は物ごとにあらたまれども我ぞふりゆく」（古今集・春上・詠み人知らず）が引かれているのは意味深長である。不変の自然と老い衰えてゆく人の対比を詠んだ名歌である。源氏は今もなお若々しいとはいえ、正月に玉鬘から四十賀を祝われたばかりである。もはや昔に戻って恋物語の主人公を演じる年齢ではないことを、冷酷にもこの引歌は示しているのである。

六

朧月夜が出家し、物語から退場するのは「若菜」下巻である。この時、源氏は四十七歳、「若菜」上巻での密会から七年の歳月が経過している。

二条の尚侍の君をば、なほ絶えず、思ひ出できこえたまへど、かくうしろめたき筋のこと、憂きものに思し知りて、かの御心弱さも、少し軽く思ひなされたまひけり。つひに御本意のことしたまひてけりと聞きたまひては、いとあはれに口惜しく、御心動きて、まづとぶらひきこえたまふ。今なむとだににほはしたまはざりけるつらさを、浅からず聞こえたまふ。

朧月夜論（大井田）

「あまの世をよそに聞かめや須磨の浦に藻塩垂れしも誰ならなくに

さまざまなる世の定めなさを心に思ひつめて、今まで後れきこえぬる口惜しさを、思し捨てつとも、避りがたき御回向のうちには、まづこそはと、あはれになむ」など、多く聞こえたまへり。とく思し立ちにしことなれど、この御妨げにかかづらひて、人にはしかあらはしたまはぬことなれど、心のうちあはれに、昔よりつらき御契りを、さすがに浅くしも思し知られぬなど、かたがたに思し出でらる。御返り、今はかくしも通ふまじき御文のとぢめと思せば、あはれにて、心とどめて書きたまふ、墨つきなど、いとをかし。「常なき世とは身一つにのみ知りはべりにしを、後れぬとのたまはせたるになむ、げに、

あま舟にいかがは思ひおくれけむ明石の浦にいきりせし君

回向には、あまねきかどにても、いかがは」とあり。濃き青鈍の紙にて、密にさしたまへる、例のことなれど、いたく過ぐしたる筆づかひ、なほ古りがたくをかしげなり。

（若菜下④二六一〜二六三頁）

この場面に先立って、源氏は柏木と女三宮の密通を知り、愕然とする。あらためて宮の幼稚さに失望し、対照的に、鬚黒との結婚を見事に処理した玉鬘の聡明さが思い出される。さらに、同じく尚侍ながらも性格は対照的な朧月夜に連想が及ぶ、という展開で

ある。宮への憤懣から、自らも重ねてきた不義密通そのものがうとましくなり、朧月夜の「心弱さ」が軽蔑されてくる。その朧月夜がついに出家を遂げてしまった。源氏は、この世に取り残された恨み言を込めつつ、見舞いの手紙を送った。「あまの世を」の歌は、あなたが尼になったことを他人事として聞けましようか、須磨の浦で辛い涙に濡れたのも誰のせいでもない、他ならぬあなたのせいだったので、の意。苦難の過去に記憶を遡らせながら、共感を求めようとする。さらに「避りがたき御回向のうちには、まづこそは」と、自分こそが第一に回向に加えられるべき、最愛の恋人であることを強調する。これに対する朧月夜の返歌「あま舟に」は、尼舟にどうしてあなたは乗り遅れたのでしょうか、明石の浦で海人舟に乗って漁をしていたあなたが、の意。いまだに出家に踏み切れない源氏の優柔不断さを難ざる趣である。源氏の贈歌の「須磨」を「明石」に転じて、あなたが流離したのも私のせいではなく、明石君との宿世によるものだったと切り返す。源氏との間に生まれた娘は入内し女御となり、多くの皇子女に恵まれた明石君、彼女の厳しい忍従は報いられ、一族の前途は輝かしい。対して、朧月夜は、入内もかなわず、皇子女を儲けることもなく、右大臣家の衰運と人生をともした。源氏の愛情も、「昔よりつらき御契り」とあるように、さほど深いものとはいえなかった（前掲、若菜上④七八頁にも「昔よりつらき御心」とあった）。遙かに身分の劣る明石君に嫉妬と羨望を抱くところ

に、朧月夜のみじめさがある。長い歳月を経て、二人の立場はすっかり逆転してしまった。「回向には、あまねきかどにても、いかがは」は、多くの衆生のため、あなた一人だけのためではない、の意で、源氏の言葉を突き放す、やはり返歌の呼吸である。出家を目前にして、「あはれ」を感じつつ源氏への最後の手紙を認める朧月夜の姿は、『竹取物語』のかぐや姫を彷彿させるものがある。

かぐや姫、「しばし待て」と言ひ、「衣着せつる人は、心異になるなりと言ふ。もの一言言ひ置くべきことありけり」と言ひて、文書く。天人、「遅し」と心もとながりたまひ、かぐや姫、「もの知らぬことなのたまひそ」とて、いみじく静かに、おほやけに御文奉りたまふ。慌てぬさまなり。（略）

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひ出でたる（拙著『竹取物語 現代語訳対照・索引付』八六～八七頁）
帝の求婚を「心強く」拒み続けたかぐや姫と朧月夜は、対蹠的に見えるけれども、この世と訣別するにあたって、そのイメージが重なり合ってくる、ということなのだろう。そもそも登場の場面から朧月夜は「月」と関わりの深い女君であった。天の羽衣を纏ったかぐや姫は人間としての感情の一切を失ったが、果たして朧月夜はこの世への執着、迷妄から解放されるのであろうか。

二条院におはしますほどにて、女君にも、今はむげに絶えぬることにて、見せたてまつりたまふ。「いといたくこそ恥づか

しめられたれ。げに、心づきなしや。さまさま心細き世の中のありさまを、よく見過ぐしつるやうなるよ。なべての世のことにては、はかなくものを言ひ交はし、時々によせて、あはれをも知り、ゆゑをも過ぐさず、よそながらの睦び交はしつべき人は、齋院とこの君とこそは残りありつるを、かくみな背き果てて、齋院はた、いみじう勤めて、紛れなく行なひにしてみたまひにたなり。なほ、こちらの人のありさまを聞き見る中に、深く思ふさまに、さすがになつかしきことの、かの人の御なずらひにだにもあらざりけるかな。女子を生ほし立てむことよ、いと難かるべきわざなりけり。宿世などいふらむものは、目に見えぬわざにて、親の心に任せがたし。生ひ立たむほどの心づかひは、なほ力入るべかめり。よくこそ、あまたかたがたに心を乱るまじき契りなりけれ。年深くいらざりしほどは、さうざうしのわざや、さまさまに見ましかばとなむ、嘆かしきをりをりありし。若宮を、心して生ほし立てたてまつりたまへ。(中略)「など聞こえたまへば、」はかばかしきさまの御後見ならずとも、世にながらへむ限りは、見たてまつらぬやうあらじ、と思ふを、いかならむ」とて、なほものを心細げにて、かく心に任せて行ひをもとどこほりなくしたまふ人々を、うらやましく思ひきこえたまへり。

「尚侍の君に、さま変はりたまへらむ装束など、まだ裁ち馴れぬほどは訪らふべきを、袈裟などはいかに縫ふものぞ。それ

朧月夜論(大井田)

せさせたまへ。一領は、六条の東の君にもものしつけむ。うるはしき法服だちては、うたて見る目もけうとかるべし。さすがに、その心ばへ見せてを」など聞こえたまふ。青鈍の一領を、ここにはせさせたまふ。作物所の人召して、忍びて、尼の御具どものさるべきはじめのたまはず。御茵、上蓆、屏風、几帳などのことも、いと忍びて、わざとがましく急がせたまひけり。

(若菜下④二六三〜二六五頁)

出家した朧月夜とのやりとりを、源氏は紫上に打ち明ける。最近、朝顔も出家を遂げてしまったのだという。性格はおよそ対蹠的な二人だが、長年にわたって折を逃がさぬ風流の文通を続けてきた点は共通する。源氏と彼女たちの交流は、「かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はさせたまふ。御返り、さすがに憎からず聞こえ交はしたまひて、面白く、木草につけても御歌を詠みて遣はず」(七三頁)という『竹取』の帝とかぐや姫のそれに通ずるものがある。あらためて源氏は彼女たちの人柄のありがたさを再認し、その出家を惜しむのだった。若い頃からの馴染みの女君が相次いで出家する一方、源氏は年来の宿志も遂げられぬまま、忸怩たる思いでいる。柏木と宮の密通後、源氏はますます厭世の思いを強めてゆくが、さりとて出家には踏み切れない。この世に取り残される源氏は、まさに『竹取』の帝であった。その源氏の愛憐執着に束縛されて出家を許されない紫上は、朧月夜と朝顔に羨望の念を禁じ得ない。朱雀院が勤行三昧の現在、朧月夜の出家

生活の支援をする者は源氏を措いてはいないが、これほどまでに手厚い芳志を示すのは、やはり彼女への未練が並々ならぬものだったからである。

むすび

右大臣家に生まれ、将来の后がねとして大切に傳かれていた朧月夜の人生は、家の仇敵とも言うべき光源氏との出逢いによって大きく変転した。また、若き日の源氏は、彼女と関わることで須磨への退去を余儀なくされた。破滅への危機感を抱くことで、官能の炎が激しく燃え上がる、情熱的な恋であった。源氏の魅力に抗しきれず容易に靡いてしまう「心弱さ」に、道理よりも情に傾斜するところに朧月夜の性格の特徴はある。源氏は、そんな彼女を軽々しいと非難しつつも、他の女君にはない不思議な魅力に惹かれ、不毛な情事に耽溺しては、破滅へと突き進んでゆく。朧月夜は帝の寵遇に忝く恐縮しては後悔するも、むしろ薄情な源氏に心奪われたままである。男女のあやにくな構図がある。

源氏の帰京後、二人の関係は次第に冷めてゆくが、それでも折々の文通は続いている。若菜上巻で再燃するけれども、源氏にとっては、紫上と女三宮の板挟みになった閉塞感からの逃避という性格が強く、長い歳月の経過を無惨にも思い知らせることとなった。朧月夜は、ようやく若菜下巻で、朝顔とほぼ時を同じく

して出家を遂げる。若き日から知る女君が、また一人、源氏のものから遠くへと去って行った。

彼女の欠点でもあり魅力でもある「心弱さ」、それは光源氏にも通ずるものであった。朧月夜の存在は、「心弱」い、光源氏の性格の一面を照らし出すものといえよう。

注

- (1) 増田繁夫「朧月夜と二条后」(大阪市立大学『人文研究』一九八〇年三月)
- (2) 村井利彦「帚木三帖仮象論」(『文芸と批評』一九六八年七月、一九六九年六月)
- (3) 吉野瑞恵「朧月夜物語の深層」(『王朝文学の生成』二〇一一年、笠間書院)
- (4) 鈴木日出男「夕顔物語の主題」(『源氏物語虚構論』二〇〇三年、東京大学出版会)
- (5) 鈴木日出男「朧月夜の君と光源氏」(『源氏物語虚構論』所収)
- (6) 拙稿「『うつほ物語』から『源氏物語』へ―物語における主人公の系譜―」(『うつほ物語の世界』二〇〇二年、風間書房)
- (7) 後藤祥子「朧月夜」(秋山虔編『源氏物語必携Ⅱ』一九八二年、学燈社)
- (8) 清水好子「朧月夜再会」(『講座 源氏物語の世界 第六集』一九八一年、有斐閣)
- (9) 鈴木日出男「山吹・藤」(『源氏物語歳時記』一九八九年、筑摩書房)

キーワード…源氏物語、朧月夜、心弱さ

Abstract

朧
月
夜
論
(大
井
田)

Characterization of Oborozukiyo

Haruhiko Oida

Oborozukiyo is the sixth daughter of the Minster of the Right. Her life changed a lot when she met Genji, the enemy of her house. Also, when he was young, he fell in love with her and wandered to Suma. It was a passionate love that burned even harder with fear of ruin. A characteristic of her personality is her weak will, which is easily overwhelmed by the temptation of Genji. He looked down on her, but on the other hand, felt a charm that no other woman had. He indulged in a barren affair with her and headed for ruin. Although she was afraid of the emperor's love, she was fascinated by the ruthless Genji. After Genji returned to Kyoto, the two became estranged, but sometimes they continued to correspond. In the chapter of Wakana 2, The two met for the first time in a long time, but felt sad about the passage of a long time. She finally left home at about the same time as Asagao in the chapter of Wakana 2. She has the image of Kaguyahime of Taketorimonogatari as well as Princess of Nijo of Isemonogatari. Her weakness and charm, weakness of will, was shared by Genji. Her presence reveals the weakness of Genji's will.

Keywords: Genjimonogatari, Oborozukiyo, weakness